

絵草紙屋の店頭に生きるイメージ——宮武外骨の絵はがきを事例に

高橋 百華（九州大学芸術工学府芸術工学専攻博士後期課程 2 年）

発表要旨：

明治以降の錦絵は、美術概念の移植による制度的な断絶[佐藤 1996]や、生産・流通体制の崩壊と新興メディアの躍進といった社会的な変化により衰退の一途をたどったとされている。後者のうちでも明治 34 年頃から流行した絵はがきは、郵便制度と重なり合いながら新たなイメージ体験として多くのひとびとを魅了した[細馬 2020]。しかし、そのような絵はがきの上に錦絵のイメージが再登場していたことはあまり注目されてこなかった。

ハンス・ベルティンクは『イメージ人類学』[2010=2014]において、伝統的な美術史研究を乗り越えるべく、イメージ＝メディア＝身体の三項から成る独自の相互関係を提示した。彼によれば、イメージには必ず支持体となるメディアとそれを知覚する身体が伴い、メディアは死したイメージのアーカイヴとして機能する一方、身体による知覚行為がイメージに生氣を吹き込むという。これを上記の日本の状況に当てはめるのならば、「死した」イメージと見なされてきた錦絵は、和紙からはがきへとそのメディアを変えることによって、明治期の人々の身体を巻き込んでいたとも考えられるのではないか。このような問いに対して、本発表は近代化を先導する新興メディアのうちで「明治の浮世絵を出版せん」[宮武 1910]と意気込んでいた宮武外骨による『絵葉書世界』に着目し、ベルティンクによる三項関係を用いて考察を試みたい。

発表前半では、錦絵からはがきへ至る変遷を歴史的に確認し、それぞれに絵草紙屋を主題とした具体例を取り上げて比較・分析する。一枚絵の錦絵や絵入り冊子を主力商品とした地本問屋「絵草紙屋」は、18 世紀中頃に登場し江戸から全国へ広がった。後に錦絵の衰退とともに明治 20 年代頃には市中から姿を消したとされているが、その一部は絵はがきの流行に乗じて絵はがき屋へと転じたとの指摘もある[鈴木 2010]。ジャーナリストである宮武がこうしたメディアの変遷に意識的であったことは、絵はがきのデザインから明らかだが、そこには、はがきの両面を使った絵解きがなぞかけのように組み込まれている。

発表後半では、絵はがき『絵草紙屋の店頭』に仕掛けられた絵解きを具体的にベルティンクによる三項関係の図式に当てはめて検証したい。というのも『絵草紙屋の店頭』においては、はがきの両面にわたって描かれた客の身体を起点として、江戸と明治のイメージ＝メディア＝身体が重層的に絡み合っているからである。以上のような考察と分析を通じて、ベルティンクの議論が近代日本の店頭でどのように変奏されるのか、その可能性と限界が明らかになるだろう。

- ・ハンス・ベルティンク、2014、『イメージ人類学』、仲間裕子訳、平凡社
- ・佐藤道信、1996、『<日本美術>誕生：近代日本の「ことば」と戦略』、講談社
- ・細馬宏通、2020、『絵はがきの時代 増補新版』、青土社
- ・宮武外骨、1910、『此花 第八枝』、雅俗文庫
- ・鈴木俊幸、2010、『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』、平凡社